

# 10 ひだまり

今月のエッセー

## 没頭すること

みなさんには、何か没頭できることはありますか。私は最近、新宿の書道教室に通い始めました。腰を据えて筆を持つのは小学生の頃に通っていた書道教室の時から数えて実に二十年ぶりのこと。遊びたい時分に渋々通っていた当時とは違い、充実した時間を過ごしています。

まわりに書道教室は沢山ありますが、わざわざ自宅から遠い新宿の教室に通っているのには理由があります。それは先生がとっても魅力的なこと。私の父ほどの年齢なのですが、達筆なだけでなく深い教養をお持ちで、たわいもない会話の中で様々なお話をして下さいます。

## 編集後記

気づいたら十月。街路樹のイチョウの木はだんだんと黄色に染まり始めています。今月のひだまり十月号のタイトルは、そんなイチョウの葉に寄せて黄色にしてみました。

私は、この鮮やかな黄色が大好きで、イチョウ並木で有名な明治神宮外苑をバイクや自転車ですーリングする瞬間がなんとも言えないくらい、気持ちいい時間です。

しかし、イチョウが咲き乱れるということは、冬の始まりを木々が告げてくれているということ。だんだん肌寒くなってくるこの季節。どうか体調には気をつけてお過ごしください。

◆ 深澤亮道

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

先日、ふとした会話の中で一人の女性に先生に尋ねました。

「そういえば、字のきれいな人は、心もきれいっていいですよ？ それなら書道家の方って、みんな心のきれいな人ばかりなんでしょうか？」

先生は少しばかり考えて、次のように答えました。

「そんなこと有りません。煩惱だらけの人もありますよ。私も含めて。」

少し驚きましたが、先生は続けます。「そんな人でも、紙に真正面から向き合って上手い下手も投げ捨てて、文字通り書に没頭しきっている時は、心の汚い部分はどこかへ行ってしまふ。だからきつと、素晴らしい書がかかるんだと思うんです。」

この言葉を聞いてから、私も上手い下手を気にせずただひたすら紙に向かうようにしています。正直上達しているかどうかは分かりませんが、でも、代わりに得られる心地よい疲労感と、いつもより一段と美味しく感じられる夕食のひとときだけで、とても満たされた気持ちになるのです。

◆ 本田真大

## 仏教のこぼれ 遊山 さん

街路樹の葉が日ごとに彩りを増し、秋の深まりを感じる今日この頃です。各地で紅葉が見頃を迎え、いよいよ行楽シーズン到来ですね。赤や黄に染まる景色を見ながら物見遊山といきたいところです。

さて、今月は「遊山」という言葉を紹介します。気晴らしにどこかへ遊びに行くことを指す言葉ですが、その語源は禅宗に由来します。「遊」は自由に歩き回ること。「山」は寺のことを指し、禅僧が他山(他の寺)へ修行遍歴の旅に出ることを言いました。

他山の師をたずね歩き、自身が納



得のいくまで行を修め続ける日々。様々な場所を歩いて回る旅路は、今では考えられないほど辛く険しい道のりだったことは想像に難くありません。しかし、その長い旅路の中でふと気づく山野の美しい景色、力強く息づく自然の営みに、禅僧たちは励まされたことでしょうか。

現在私たちが使っている気晴らしの意味での「遊山」は、かつての禅僧たちが感じた自然への想いが含まれているのです。行楽の秋、今だけの彩りにあふれた自然を肌で感じてみてはいかがでしょうか？

◆ 山内弾正



# 法のお話



一年度  
ひさまつしょうげん  
久松彰彦

## だるまさんと功德

十月といえば衣替えの季節ですね。夏物をしまつて、冬物を出す時期です。私たち僧侶も、修行中でも衣替えがありました。その境になっていくのがだるまさんの命日の法要です。だるまさんといえば縁起物のだるま、だるま落としなど、日本人に広く親しまれています。そんなだるまさんですが、実は「禅宗の祖」という顔も持っているのです。

だるまは漢字では達磨と書きます。達磨さんは中国の山にこもり、九年間も坐禅を続けました。長い坐禅によって手足が腐り、それが縁起物の丸い姿の由来だとも言われています。元々出身はインドやペルシヤの方だったとされ、六十代後半になつ

てから中国へと渡りました。そして当時の中国、梁(502年〜557年)の武帝に招かれ、次のような問答を交わします。

武帝「私は寺院を建立し、多くの人々を度度させ、仏像を造り、経典を書いたしましたが、どれほどの功德がありましたでしょうか」  
達磨「功德などない」

お寺や仏像を建てること、また得度(人々をお坊さんにすること)、仏典を写すことは莫大なお金と時間がかかります。それだけ惜しみなく仏教に尽くしたのが武帝でした。しかしこういったことに功德、つまり仏様からの見返りは無い、と達磨さんは断言するのです。

なぜ達磨さんはそのように言ったのでしょうか。一つ考えられることは、達磨さんが武帝の行為自体ではなく、その動機に目をつけていたということです。武帝の行いはもちろん仏教に貢献しようというものでした。しかしそれは純粋な目的からなされたものだったのでしょうか。お寺や仏像を建てること

中に「自分はこれだけのことをやったのだ」と、賞賛を受けたいという思いがあったのではないのでしょうか。

私は中学生のころ、災害ボランティアに入った経験がありました。そうしたこと話をすると、周りの大人は「偉いね」と言ってくれました。それを聞いて私は、「ああ、これは素晴らしいことなんだ」と得意な気持ちになりました。浮ついていたのかも知れません。親にもボランティアの話をしたのですが、「そう、お疲れ様」と、想像していたよりも全然薄い反応が返ってきました。

その当時は薄情な親だ、と思っていました。しかし今振り返ってみると当時の私には「これだけ偉いことをしました！褒めてください！」なんていう思いがにじみ出ていたのかもしれない。

どんなに良い行いであっても、それが周りに褒められるためのものになってしまったら、もはやそれは良い行いとしては認められないのです。「人から褒められたい」という思いにとらわれないためにも、自分の行いに対しては常に謙虚な気持ちを持ち続けていきたいものです。

## お寺散策

### 鶴松山 実相院

世田谷の閑静な住宅地にあるこのお寺は、緑が溢れ四季に応じて様々な表情を見せてお参りに来られる方々の目を楽しませていきます。また境内は、「弦巻實相院界わい」として「せたがや百景」の一つに数えられ、地域住民の憩いの場ともなっています。

かつてここは世田谷城が廃城になったお寺、城主吉良氏朝が閑居した場所でした。そのため、開基家である氏朝夫妻の戒名から山号と寺名がつけられました。その後、江戸時代には十石のご朱印状を拝領したことが記録に残されています。

境内には、貴重な文化財が今でも多く残されています。例えば、ご朱印状を持ったお寺であることを示す石碑や、江戸城の石垣を作る際に余った大きな石、大蔵大臣として活躍した高橋是清の「髭」のお墓。探せばきりが無いほど境内にはたくさん文化財があります。皆さんも是非ともお参りしてみてください。



山門

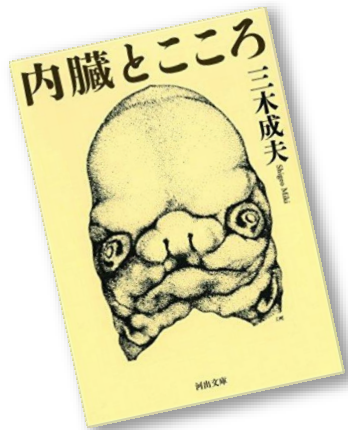


江戸城石垣の残石

◆伊藤正法



## ひだまり書房



### 内臓とこころ

著 三木 成夫

私たちは日ごろ、よく「心で感じる」と言います。この「こころで感じる」といった時の「こころ」とは、いったいなにを指しているのでしょうか？

三木成夫氏は解剖学の観点から、内臓に注目して「こころ」との関係を描いています。そして、この本の面白いところはそこからの展開です。私たちが暮らす地球や太陽系の周期と、内臓との関わりを解剖学以外の分野からも観察し、持論を展開していきます。最後には「こころ」の生命的な本質、人の誕生と成長まで語られます。

本書は、独特の語り口やユーモアあふれる表現で「三木節」と呼ばれ大人気だった講演会を書き起こしたものです。その三木節で語られる「内臓とこころ」の話は、臨場感もあり、やさしく面白く、わかりやすい一冊となっています。

◆深澤亮道